身の丈
第五十三話　平成三十一年二月十一日（紀元節）

　和服をつくるとき、まずは身の丈を計る。古着を探すときも、まずは身の丈に合わせる。
　昔の人は、この「身の丈」を「身丈（身長）」の意味以外によく使った。「身の丈」に合わせろと、よく叱った、よく叱られた。

　そのまた昔の人は、「身の丈」をよく知っていた。ひと目、見ればひと様の身の丈がわかる。髪の結い方、着物の類でひと目でわかった。己の身の丈もひと目で、ひと様からわかることも百も承知。

　いまの世の民事事件簿。この「身の丈」を忘れた、いや己の身の丈を問うと云う習慣がなくなったことから端を発することが多い。文化がその言葉をなくしたとき、その言葉の働きも失う。

　山本周五郎、藤沢周平、その他諸々の時代小説の通奏低音に「身の丈」が流れている。人の生き様は、生まれ持った「身の丈」との葛藤でもある。いや、葛藤と云い切ってよい。
　時代小説ファンには「身の丈」の時代への郷愁があると云い切ってよい。身分制度への郷愁ではない。己の運命を一旦は引き受ける。引き受けたあと、「身の丈」の違う者との葛藤。「身の丈」の違う場との葛藤で襟を正そうとする。襟を正すことで髪の結い方、着物の類の「身の丈」が違おうとも己を誇ることができる。

　いまの世の「身の丈」を強制的に忘れさせる教育をする。幼児から。「人権」が錦の御旗。と云っても学歴、職種、貧富の「身の丈」は依然として存在する。ゆえに葛藤は存在する。しかし、「人権」が錦の御旗。人は生まれながら皆、平等。頭の中だけのこと。葛藤の心棒を骨抜きする。この矛盾がいびつさを生む。美しくない世が加速されていく。
　人はそれぞれ異なった「身の丈」をもってで生まれてくる。この生まれつきの「身の丈」を幼児から育つ環境との葛藤が人の成長である。

　人が劣化していく。ロング・ピース（長い平和）は嫌いだ。ショート・ピースを輪切りし煙管の日皿に詰め吹かす。紫煙が「♪春は名のみの風の寒さや」の寒空に流れてゆく。